

〈お茶の水女子大学「幼・保・大」連携保育研究の試み(29)〉

## 「ジャガイモパーティー」とその周辺

— 開かれるため、また、閉じられるためにある扉 —

菊地 知子

### 幼稚園とナーサリーの日々の触れ合い

お茶の水女子大学の附属幼稚園（以下、幼稚園）と附属いずみナーサリー（以下、ナーサリー）は、歴史も保育形態も違う、それぞれ三〜五歳児、〇〜二歳児が通う保育施設である。「お山」と称される庭の高い側にナーサリーの建物が、低い方に幼稚園舎が、それぞれにある。大学附属の、同じ小さな子どもたちのための場としてありつつも、一つの建物に二つの組織がある

ような一体化を目指すことなく、それでも日々の保育の中で、それぞれに属する人と人とが緩やかに出会うようなかわりが続いている。

入口を異にして隣り合う、小さな人たちの過ごす場で、たかさんの「いらっしやい」と「また来てね」、そして、「ただいま」と「おかえり」が、日常的に繰り返されている。その相互性と未来性に満ちたうれしさを、私は次の詩に込めた。

とんとんとん とんとんとん

扉をたたくのは、だれ？

それは昨日から今日へと生きたわたし

未知なる明日へつながるように

わたしに向って扉は開かれ、

再び開かれる時を待って

希望を含んで閉じられる

たかさんの「ただいま」と

たかさんの「おかえり」が、

たかさんの「いらっしやい」と

たかさんの「またくるね」が、

人と人をつむぐ 出会いをつむぐ

とんとんとん とんとんとん

扉をたたくのは、だれ？

それは今日から明日へと生きるあなた

新たなる昨日へ戻れるように

あなたに向って扉は開かれ

再び開かれる時を待って

希望を含んで閉じられる

とんとんとん とんとんとん

扉をたたくのは、だれ？

### ジャガイモパーティーに駆けつける

六月のある朝私は自宅に電話とメールとをもらう。

「ジャガイモパーティー決行です。どうぞ見に来てください」という、幼稚園の先生からのものだった。その前週、幼稚園の子どもたちは、雨でいく日か延期になる憂き目に遭いながらも、年中児と年長児に恒例のジャガイモ掘りを体験した。取ってきたジャガイモを大きさごとに選別したり陰干ししたり洗ったりと、年長児を中心に、ジャガイモにまつわる活動が日々展開する。そして迎えた屋外でのジャガイモパーティーで

ある。

二〇〇八年度の初めてのころに、私は幼稚園とナーサリーの子どもたちが集うともなく集う場面、あるいは行事などに招いたり招かれたりする場面を、時折見せてくださいと、幼稚園とナーサリーの双方に申し出ていた。それに応えてくださる形で、うれしい連絡であった。

私は、急ぎ家を飛び出し、ジャガイモパーティーの様子を見せていただいた。長い時間ではなかったが、そのとき私に見ることのできたことを、幼稚園副園長のM先生とナーサリー主任のK先生に同報でお送りした。以下が、その報告である。

「M先生、K先生、

昨日は、ジャガイモパーティー決行のご連絡をいただきありがとうございます！

M先生からのお電話を受けて猛ダッシュ。おかげさ

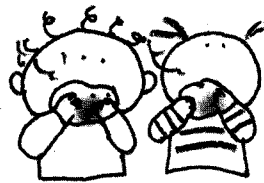
まで、十時半ころナーサリーに到着しました。

もうすでにジャガイモパーティーに行って戻って来た人がナーサリーの室内で過ごして

いましたが、後の人たちは下の幼稚園にいますので早速お山を駆け下りて、見に行きました。

私が降りて行ったときには、ジャガイモパーティーのテーブルのところにはナーサリーの子どもは二人だけ保育士のN先生と居て、小さい人用にと用意された小さめのゆでジャガイモを、ハグハグと食べていました。それより大きめのジャガイモを、お手伝いのお母さんから供されて、私もいただきました。だいたいの子どもたちは食べ終えて遊び始めていたようです。

ほかの人たちは、そのときすでにジャガイモを食





べ終えて、園庭のあちこちに居ました。スコップでお砂場を掘ったり、滑り台をしたり、幼稚園の人たちの集う様子を、近づいたり少し遠巻きになったりしながら見るなど思い思いに過ごしていました。

H先生（幼稚園）と年長の子どもたちが年中さんへのおもてなしに『ハッピーチルドレン』（新沢としひこ・作詞、中川ひろたか・作曲）を振り付きでう

たっているときなど、砂場あたりに何となく集まっていたナーサリーの子どもたちが、みんなでそちらを見て、聞いていました。年長さんたちがうたい終わって拍手されるのを見

届けると「おわった、おわった」とでも言うように、またそれぞれの活動をするべく向き直って、せつせと遊び始めたりして。年中児、年長児の輪の中に、その背中を見ながらゆるやかにふんわりと混じっている様子が、何とも味わい深く感じられました。

昨年度の「ジャガイモパーティー」は二歳の人だけの参加だったとのことですが、今年は一歳の人はもちろん、〇歳の人たちも、保育士さんに抱かれて来て、一人ひとり明らかに幼稚園の先生や園児たちにも支えられて、確かな存在感を漂わせて、場に加わっていたように思いました。保育士のS先生に抱かれてやってきた〇歳児のKちゃんは、幼稚園の先生たちにも代わるがわる抱っこされ、担任の先生が抱っこすると、その周りに園児たちがやってきて、赤ちゃんに触ってみたり、先生にべたべたと甘えたりする姿がありました。担任の先生が赤ちゃんを保育士のS先生に返すや園児たちは自分が抱っこされ

て、抱っこされた赤ちゃんと同じ姿勢になって視線を交わすなど、赤ちゃんが真ん中にいて人が集まると、こんなによさしい甘い空気になるんだなとしみじみ思いました。S先生はナーサリーに戻ってうれしそうに「Kちゃん、大人気でした」と報告していました。

Kちゃんの抱っこ場面だけでなく、園児と保育士さん、ナーサリーの子どもと幼稚園の先生という場面もたくさん見ました。また、ナーサリーに戻るころ、ようやく自分たちがジャガイモにありつける番が来た年長の子の何人かが、H先生（幼稚園）の呼びかけに応え、ナーサリーの子どもたちと手をつないで、ナーサリーの扉までゆっくりとお山を登って送ってくれたのもとても印象的でした。誰も全然焦らずゆったりと、何とものんきに、小さい人と大きい人が手をつないで歩く姿を背中から見、何だか無性に静かな笑いがこみあげてきました」

後から聞いたところによると、十時ごろに年長のお兄さんお姉さんが、ナーサリーまでお迎えに来てくれて、一、二歳児は一人ひとり手をつないでもらって、ジャガイモパーティーの「会場」である園庭へと誘われたのだそう。小さな手に少し大きな手を重ね、つないで歩く姿も、今ではずいぶん見慣れたことになったように思う。

### ジャガイモパーティー前後

「ジャガイモパーティー」に先立ち、幼稚園の「お山」と称される園庭の高みの部分に向かって開く扉から、ナーサリーの子どもたちが、幼稚園側に出て遊ぶ姿を見せていただく日もあった。幼稚園のI先生が、年長の子どもたちと一緒に、ウサギを抱いて「お山」にやってきて「ウサギさんいるよー」と声をかけると、ナーサリーの子どもたちがトタトタと近づいて、ウサギに触らせてもらったり、やや遠巻きに眺めた

り、追いかけてたりすることもあった。

それと同日、「お山」の隅にある（大人の背の高さほどの）築山に上る年長男児の姿に触発されるように、ナーサリーの子どもたちも果敢に保育士と一緒に築山を登り始め、「山頂」で年長の子が持っていた虫かごをのぞきこんだり大人を仲介におしゃべりをしたりと、和やかなやりとりをしていた。築山にはその後、段ボールを持って滑りにきた年長女児二名が加わり、K先生（ナーサリー）が二歳のHちゃんを抱っこして、段ボールで滑り降りるときに、年長男児TくんがK先生の背中におんぶして、一緒に滑る姿などもあった。

年長児を中心に、幼稚園の子どもたちがナーサリーのガラスの扉を自らたたいて「ジャガイモパーティーに来てください」と誘いに行くことのできる日常が、いかにうれしい相互性に満ちているかを改めて思う。その扉は果たして確かに「いらっしやい」という思い

と共に年長児たちに向って開かれ、「また来てね」と閉じられる。「ジャガイモパーティー」以降の別の活動でも、同様のことが語られ得る。子どもたちが「フアーブルはくぶつかん」と称した催し物ふうの活動のポスターを多めに複写し、幼稚園内に貼りきれないとわかったとき、迷いもなくポスターを携えてナーサリーを訪ねて扉をたたき、ナーサリーのお部屋にポスターを貼ってもらった、という話も聞いた。

日々起こる一つひとつの小さな出会いと別れ、そして共に過ごすやさやかな時間が、子どもたちに、また大人たちに、何を思わせているのか、どんなふう to 気持ちは動いているのか。触れ合うことで一人ひとりにあるいは人と人との間で、何かが確かに波打っていることを感じつつ、私も静かに、けれどしっかりと、伝わってくる波動をとらえていたいと思う。

（お茶の水女子大学 幼保プロジェクト 専任講師）